

パネルディスカッション2 企画概要

タイトル	薬剤師にどこまで任せてもらえるか
------	------------------

概要

在宅での療養に 薬剤師はどれほどの関与ができるのでしょうか？
入院患者が退院後に自宅で安全・安心に過ごすには、退院後の生活が十分想定された患者ケアフォローを病院スタッフに行ってもらうことが最初の鍵となります。それが円滑に運ぶためには、病院内外の医療、介護関係者の相互理解が必要です。お互い理解すべきことの一つに、今回のテーマである「薬剤師にどこまで任せてもらえるか」があると考えます。在宅訪問薬剤師には、薬剤/資材の供給/配達・配薬/残薬の管理が真っ先に期待されがちですが、多くの薬剤師が前述の仕事はこなした上で「自分たちの職能を信じてもっといろいろ（処方提案など）やりたい」と思っているはずです。しかし現状では、他職種に理解してもらう方法を模索しながらもう一步が踏み出せずにいることも多いのではないのでしょうか。提供ケアの質と効率の維持向上のためには薬剤師の日常的な処方設計は不可欠という、ずっと進んだ認識の医療チームも確かにありますが、まだその数は少ないと言わざるを得ません。

そこで今回は、薬剤師への期待も含め、病院・在宅双方の視点および医師・薬剤師の立場から、「薬剤師にどこまで任せてもらえるか」をテーマとしてご意見をいただきます。岩手県のがん拠点病院腫瘍内科医師の蒲生先生には、がん化学療法や緩和ケアにおけるチーム医療を外来で展開する上で薬剤師に任せたいこととその課題について、また長崎Dr. ネット理事で安中脳神経外科医院院長の安中先生には、在宅医としての経験を通して、病院薬剤師、開局薬剤師の双方の役割分担や期待する活動内容とそれを可能にするための条件などについてコメント頂きます。一方病院薬剤師として活躍されている尾関先生には、病棟活動を通して在宅側のスタッフと協働しスムーズな在宅移行をと支援している活動内容について、在宅医療で活発に活動される坂本先生には、複数の在宅医療チームに所属する立場から、薬剤師に任せている役割と課題について、さらに飯山先生には浜松市・P 浜ねっと事務局として話題提供をいただく予定です。

本シンポジウムに参加された全ての職種の方々の「薬剤師に任せたいこと」への認識がこれまで以上に深まり、今後各地での薬剤師の活躍につながっていくことを期待します。